

「心の四季」を歌うにあたって その2

●宗教曲的構成

まずは曲全体の構成からみてみよう。この組曲は天の創造物としての自然と人、そして二者の調和と抗いをテーマとして、古くからヨーロッパで歌われてきたモテットのような宗教曲的構成を念頭に作られているといえよう。

モテットによくあるいわゆるシンメトリー的な構成に全7曲を巧みに配して、第1曲と終曲、そして折り返しとなる中間部（第4曲）にコラールとしての穏やかな区切りの曲を、それ以外は展開部となる動きある曲を配置して安定感のある構成に仕上げている。特に終曲は、それぞれの曲のテーマとなっている音型を配置し、集大成の趣を持たせ、宇宙にも通じる普遍性を感じさせながら組曲全体を閉じている。

●リズム

もう一つこの組曲の持つ特徴として「リズム」の絶妙な使い方に言及してみよう。

自論ではあるが、人間を取り巻く自然界の時間的な「リズム」は概ね3の倍数即ち「3拍子」的に進行していると考えられる。例えば…1年は12カ月、1ヶ月は大体30日、1日24時間、1時間は60分、1分は60秒、という具合に…である。キリスト教においても昔から「父と子と聖霊」という3つの要素を持ち、宗教音楽界に「3拍子」を『完全拍子』として影響を与えた経緯がある。（逆に「4拍子」は『不完全拍子』として扱われた。）

一方人間界は、2の倍数…目耳、手足は基本2つ、指は10本、二足で歩行し、男女2人が新たな家族を構成していく…という風に「2拍子（またはその倍の4拍子）」が基本で回っている様に思う。勿論人間だってワルツは踊るし12進法も使うがそれは特別な時で、上手く使いこなさなければギクシャクしてしまう。

この組曲の拍子（=リズム）に目を向けてみよう。第1曲目と2曲目が4拍子、4曲目は2拍子、そして終曲が再び4拍子、その間を縫うように巧く3拍子を配列している。8分の12拍子のように4拍子の中にある3拍子のリズムを動きある曲に持ってきたり、さらに合唱は4拍子だがピアノは3拍子だったり、またその逆も有り、作曲者の3拍子と4拍子に対する混成的な使い方に興味が湧く。

第1曲「風が」は『心(中の)四季』を4拍子で進めながら、「3」に対する拘りを強く持つ…例えば、前奏で3度進行のテーマを3つ連ねたり、ソプラノの最後の音はセオリー通りならドで終わるところを第3音の「ミ」で閉じたり。また終曲「真昼の星」後半部分に至っては、3拍子と4拍子が一体となって進み、あたかも自然と人間が調和と抗いに一旦終止を打つような纏まりを見せて終わる。

T.Ozaki

その3では詩人・吉野弘について書いてみようと思う。

2017/05/18